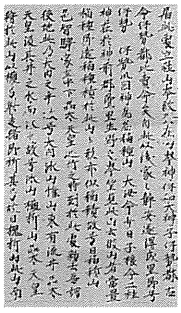
文化財見学シリーズ 21　　姫路市教育委員会文化財課（昭和63年８月31日発行）
（平成９年９月補筆訂正）

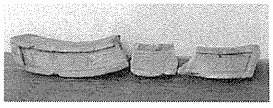
『太市（おおいち）の里』をたずねて

「太市」の地名の起こり　『播磨国風土記』の揖保郡邑智駅家（おおちのうまや）の条に、応神天皇がこの地に来て「私は狭い土地だと思ったのに、まことは大内（内側は広大）である。」といわれたので大内と名づけた、と書かれている。現在の太市（西脇、太市中、相野、石倉）は、風土記の揖保郡邑智里と林田里の一部及び餝磨郡漢部（あやべ）里の一部とにまたがる地域で、邑智里は霊亀元年（715）里を郷に改め大市郷に移行した。郷名は『和名類聚鈔』に記載され、「於保知」（高山寺本）や「於布智」（大東急記念文庫本）と訓（よ）んでいる。大市郷の名は、姫路市船津町正八幡神社所蔵の軒平瓦に「大市郷」「正和三甲寅」（1314）と見える。また、応永５年（1398）の守護赤松義則年寄連署奉書に「一宮与書写山論所播州大市郷内講田拾壱町弐段余事…以下略」とあり、宍粟郡伊和神社と書写山円教寺との間に「大市郷内講田」をめぐる相論があったことを伝えている。

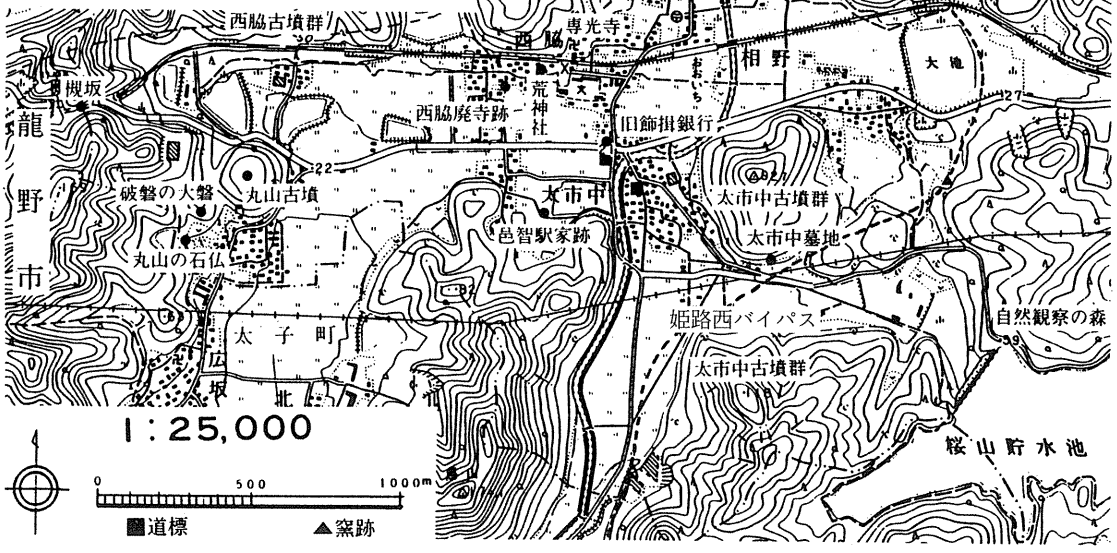
大市郷の名は近世まで残り、江戸時代に刊行された『播州揖西郡龍野志』（衣笠明新著）に「大市郷　凡十ヶ村　広坂村　谷村　西脇村　同出屋敷村　打越村　北山村　石倉村　中村　鵜飼村　相野村」と記載され、大市郷の範囲をほぼ伺うことができる。江戸時代の大市は龍野藩領に属し、明治22年西脇・太市中・相野・石倉の４ヶ所を合わせて太市村と称した。現在の「太市」の用字がいつごろから始まったかは定かでない。



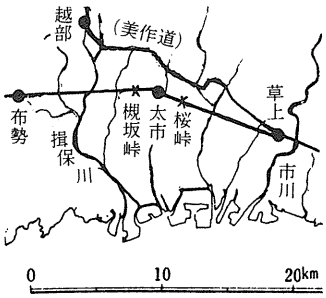
風土記、
←邑智駅家の条



正八幡神社蔵の古瓦



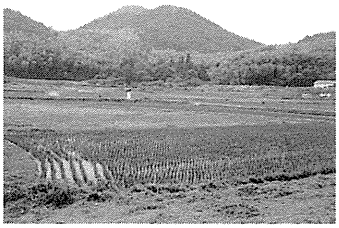
邑智（大市）駅家　10世紀に編さんされた『延喜式』に記載されている駅家は播磨国では９駅で、そのうち山陽道沿いの７駅の中の１つが邑智（大市）駅家である。青山から桜峠を超えて太市中・西脇を通り槻坂を経て龍野市揖西町小丸山の布勢駅に通ずる折れ線グラフ状のルートは、古代山陽道の駅路・官道で、このルートに南接した向山古瓦出土地（太市中字向山）が邑智駅家跡といわれ、その北側には馬屋田の字名が残っている。駅家は瓦葺、朱塗りの柱に白壁（続日本紀巻９など）、駅馬の員数は20匹（延喜式28、廐牧令）であった。



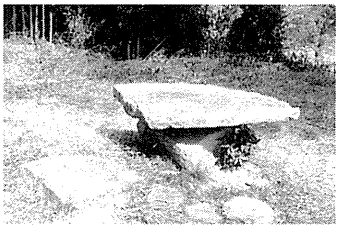
古代山陽道のルート

従来、邑智駅家は山陽道と美作路の分岐点と言われてきたが、播磨国府域内の本町遺跡が草上駅家に比定され、草上駅家が分岐点と考えられている（「本町遺跡」姫路市教委刊）。

太市中古墳郡　太市中の集落の東部と東南部の山麓から山腹にかけて数十基の古墳が点在していた。いずれも古墳時代後期の横穴式石室を内蔵する６世紀の古墳であったが、姫路西バイパス工事の為、一部を残すのみとなった。


駅家跡（向山遺跡）

太市中墓地の石棺　公営の火葬場ができて、昔のような野辺送りもなくなった。墓地には葬式の時に棺をのせ導師が送り引導を唱える引導台（蓮華台・棺台）があり、かっての葬送習俗をうかがうことができる。引導台は一部欠失しているが、組合式家形石棺の底石（縦171.7㎝、横120㎝）である。


太市中の石棺

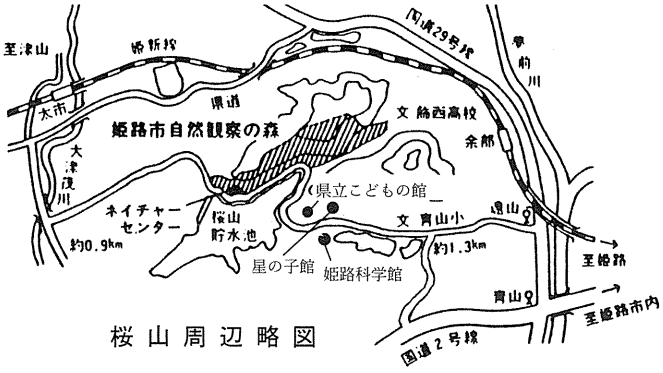
桜山貯水池　新日本製鉄株式会社の工業用水を確保するための貯水池。当初、揖保川から揚水して非常時に備える保安用として、昭和15年６月に着工されたが、戦時中のため資材不足等で工事が延び、昭和20年５月貯水量100万㎥（計画の４分の１）を確保できる段階で工事は中断された。戦後、工業用水の需要増のため昭和35年11月から37年３月にかけて堰堤の嵩上げ工事を行ない、有効貯水量446万㎥の貯水池が完成した。堰堤は高さ39ｍ、頂長350ｍ、頂幅４ｍ、最大底幅37.9ｍ。貯水池の最大水深30ｍ、満水時面積33万㎡、満水時周囲3,800ｍ。

桜山貯水池

姫路市自然観察の森と姫路科学館

自然環境にめぐまれた桜山貯水池周辺は、四季を通じて植物・昆虫・野鳥などの観察には恰好の地で、北岸一帯は「自然観察の森」として設備がととのっている。自然観察路や野鳥観察小屋が設けられ、中心施設のネイチャーセンターではレンジャー（自然観察指導員）から、動植物や自然環境などについての話を聞くことができる。

また、自然観察の森の東側には県立こどもの館や市立の星の子館、姫路科学館などの県、市の施設があり、文化ゾーンを形成している。姫路科学館のプラネタリウムは国内最大級の直径27ｍもあるドームスクリーンを持ち、星の子館には同じく国内最大級の90㎝反射望遠鏡が設置されている。



桜山周辺略図

丸山の石仏（西脇）　高さ128㎝、幅73㎝、厚さ20㎝の板状の石材を使用し、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵立像を線刻の蓮華座上に刻出している。像容の向って左側に「応安元年戊申廿四日」（1368）の紀年銘が刻まれている。

槻坂　姫路市と龍野市との境界。『播磨国風土記』には槻折山と記載されている。姫新線の槻坂トンネルを掘削中に、黒っぽい頁岩の中からダオネラ（２枚貝の一種、約２億5000年前の中世代第三畳紀を代表するもの）の化石が発見された。

西脇古墳群　姫新線太市駅の西方約1.5㎞の南向き山地斜面には、多数の古墳がある。この古墳群が山陽自動車道の計画路線内に位置するため、昭和60年５月から事前の発掘調査が行われた。

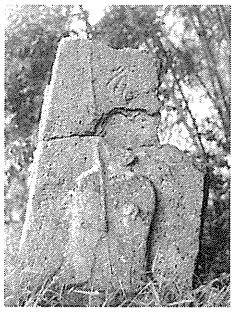
西脇古墳群は終末期の群集墳で、大部分は７世紀代に造られた古墳であるが、一部６世紀初頭頃のもの（75～78号墳）もある。いずれも小型の墳丘を持つ古墳で、主体部は無袖の横穴式石室や小竪穴式石室と組合せ式石棺である。12号墳と13号墳付近では、奈良時代の火葬骨を入れた骨蔵器が検出されている。出土遺物に鉄剣、刀子鉄鏃、鉄釘、勾玉、ガラス小玉、耳環、馬具、土師器、須恵器などがある。

西脇の石仏　荒神社境内の小祠に安置されている。上部が欠損しているが、凝灰岩の舟形状石材を用いて、蓮華座上に宝珠と錫杖を持つ仏高23㎝の地蔵立像が刻出されている。像容の向って左に「永正十年八月日」（1513）の紀年銘を陰刻している。
注目すべきはチューリップ状の３弁の蓮華座である。蓮華座は５弁より成るのが普通だが、これは３弁で形が小さく簡略化したもので、他に類例の少ない珍しい手法である。

西脇廃寺　塔屋敷と呼ばれる処に塔心礎が置かれている。もと塔屋敷の中央付近にあったが、耕作の障害となるので現在地に移された。長径125㎝、短径115㎝、表面のほぼ中央に直径18㎝、深さ11㎝の円形孔がある。石質は凝灰岩。遺構は湮滅して瓦類も検出されていないが、塔心礎の形式から西脇廃寺は奈良時代の創建と推定される。

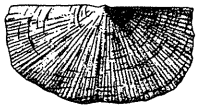
専光寺の石棺（西脇）　鐘楼の西に保管されている。縦198㎝、横95㎝、深さ38㎝の刳抜式家形石棺身。この石棺については前出の『龍野志』古跡の項に「浄安寺西脇村山下寺跡有、峰相の末寺也、近頃里民石の手水鉢を地より堀出す、今は村内専光寺の境内にあり」、と記載されている。

破磐神社（西脇）　祭神は神功皇后、仲哀天皇、応神天皇。神功皇后が麻生山から射た３本の矢のうち最後の矢は、大市郷西脇村の大磐を３つに破ったのでこれを吉兆としてその矢を祭り、破磐の祠として崇めたと伝えられている。伝説の大磐は神社の西南約２㎞の山中にある。千灯祭（７月31日）や奉点灯祭（８月15日）の火祭りの行事などで知られている。


丸山の石仏

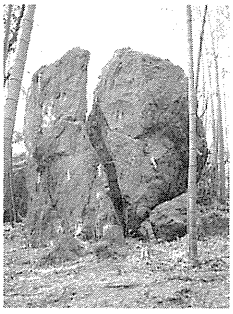
西脇古墳群の発掘調査

西脇の石仏


ダオネラの化石

西脇廃寺塔心礎

専光寺の石棺


破磐の大磐

破磐神社

観音寺（西脇）　かつて谷村に峰相山鶏足寺の別院があったが、現在の観音寺がその法統を継ぐものである。堂内に絵馬と羽子板が奉納されている。12面の絵馬のうち４面は珍しい麦藁絵馬である。麦藁細工の盛んな城崎地方では麦藁絵馬も知られているが、城崎地方以外ではここしか見られない貴重な遺品である。中でも寛政８年４月18日の紀年銘のある「筍堀り図」は、全体の構図といい細工といい実にすばらしい絵馬である。

石　鞍

石鞍（石倉）　稲荷神社入口石階段の西側に置かれている。旧因幡街道沿にあって多くの人々に注目されたため、播磨の名所古跡として古くから知られており、『播磨鑑』や『播陽万宝智恵袋』などの古書にも記載されている。

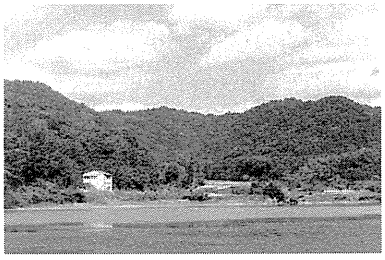
鶏足寺跡（石倉）　峰相山々頂の南西斜面に数段の平坦面が見うけられる。古瓦や礎石が散乱し、石階段・井戸・石垣・墓地・経塚などの遺構が残っている。このあたりが峰相山鶏足寺跡と想定されるところである。鶏足寺は神功皇后が連れ帰った新羅国の王子が草創した寺と伝えられている。奈良時代の神護景雲（767～770）頃には大伽藍がそびえ、僧侶300余人に達したという。貞観(859～877）頃より衰え、堂宇も減少していった。その後、寺内に市が開かれてにぎわった時期もあったが、それも長くは続かなかった。貞和４年（1348）の頃にはわずかに本仏殿と常行堂の二堂の他、１社と、僧坊６、７棟が残るのみとなった。天正６年（1578）８月羽柴秀吉に抗したために全山焼失し、その後は再興されることなく廃寺となった。

峰相山　打越・上伊勢・下伊勢・石倉にまたがり、揖保郡と飾磨郡の郡境である峰相山は、『播磨国風土記』林田里の条に「稲種（いなたね）山」と記されている。尾根づたいに山陽自然歩道が通じ、標高239.7ｍの山頂には中世の山城の遺構が残っている。山頂から尾根道を南東に進むと、横穴式石室を内蔵する２基の古墳がある。いずれも封土が流失し石室が露出している。

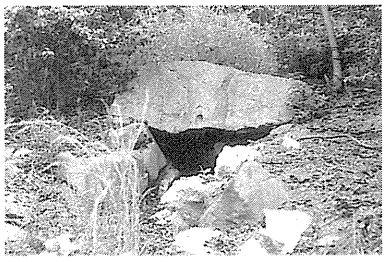
相野　『播磨国風土記』の餝磨郡漢部（あやべ）里の「阿比野」の遺称地。

太市古窯跡　太市を中心に、北は峰相山から南は青山の山田峠までの間（峰相山、赤坂、観音寺、西脇、大池、桜峠、山田峠）には、古墳時代から平安時代までの須恵器窯跡が約50基認められる(そのうち21基は消滅)。多くは、須恵器を専門に焼いたものであるが、なかには瓦も焼いていた窯もある。昭和61年発掘調査された石倉の窯跡（赤坂１号窯）からは、須恵器とともに鴟尾（しび）（４種170点)、軒丸瓦（辻井廃寺跡出土のものと同文、同笵)、円面硯(６個体分）などが出土している。窯の操業時期は８世紀前半頃と比定され、窯は全長7.5ｍ、幅2.4ｍ、高低差2.5ｍの登り窯で、当時としては普通の規模である。

麦わら絵馬「筍堀り図」

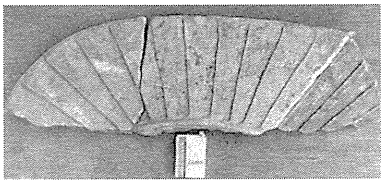


峰相山遠景



大谷山古墳

赤坂１号窯跡



出土した鴟尾の一部

■編集　増田重信
（姫路市文化財保護審議委員
〃　　嘱託調査員）